

2016年(平成28年)4月4日

平成27年度「第8回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞」  
受賞者の決定および表彰式開催のお知らせ

スポーツを支える2名の「縁の下の力持ち」を表彰

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団(YMFS)では、「第8回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞」の選考を行ない、平成27年度の受賞者を下記のとおり決定しました。

同賞は、スポーツ振興において多大なる実績を残すとともに、その功績によって社会の活性化に貢献した人物・団体を表彰する制度です。スポーツに関するさまざまな分野において高く評価されるに相応しい功績を挙げながら、これまで注目を浴びることの少なかった「縁の下の力持ち」にスポットライトを当てています。

なお、平成27年度「第8回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 表彰式」を、2016年4月22日(金)、東京都千代田区の如水会館にて開催します。

記

第8回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 受賞者 (敬称略)



公益財団法人日本障がい者スポーツ協会 推薦

[功労賞] **藤原 進一郎** ふじわら しんいちろう

日本障がい者体育・スポーツ研究会 元・理事長、日本障がい者スポーツ協会 元・理事、技術委員会 元・委員長、日本パラリンピック委員会 元・運営委員、  
極東・南太平洋身体障害者スポーツ連盟(当時) スポーツ委員会 元・委員長

「すべての障がい者の生活にスポーツを——」その信念を貫いた40年



株式会社ベースボール・マガジン社 ラグビーマガジン編集部 推薦

[奨励賞] **中島 正太** なかじま しょうた

前・15人制男子ラグビー日本代表チーム/現・7人制男子ラグビー日本代表チーム アナリスト

先端技術を駆使したデータ分析で、ラグビー日本代表の躍進に貢献

「ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞」概要

ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞は、スポーツ振興において多大なる実績を残すとともに、その功績によって社会の活性化に貢献した人物・団体を表彰し、受賞者のためめぬ努力と成果に敬意を表するものです。競技、指導、研究、普及、ジャーナリズムなどさまざまな分野において功績を挙げた「縁の下の力持ち」にスポットライトを当てるとともに、受賞者の実像を通してチャレンジすることの尊さや、「努力は報われる」という信念を社会に広げることがめざした表彰制度です。

	対象となるチャレンジ	選考のポイント	賞金/副賞
功労賞	長年にわたるスポーツ振興への貢献や、先駆者として実績を挙げたチャレンジ	長年もしくは過去に行われ、年数を経てから高い成果と認められた尊敬に値する礎的、先駆的なチャレンジであること。たとえば指導者、研究者、審判、ジャーナリストなどによる、その競技やスポーツ全体の底上げに貢献したチャレンジなど。	賞金 100万円 (団体は 200万円)
奨励賞	今後のスポーツ振興に大きな影響力が期待される、その年、極めて高い成果を挙げたチャレンジ	短期的、もしくは中期的に行われ、その年に高い評価を受けた賞賛に値するチャレンジであること。たとえば世界レベルの成果を発揮するにあたり、重要な役割を果たした指導者、研究者、サポートメンバー、審判、ジャーナリストによるチャレンジなど。	賞状・メダル 副賞

■ この件に関するお問い合わせは、下記までご連絡ください ■

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団(YMFS) 事務局: 担当・山本

〒438-8501 静岡県磐田市新貝 2500 番地 Tel. 0538-32-9827 Fax. 0538-32-1112 <http://www.ymfs.jp>

**歴代受賞者** (敬称略)

第1回 平成20年度	功労賞	中野 政美 (柔道指導者) 女子柔道の世界レベル選手の育成と女子柔道の発展
	奨励賞	丸山 弘道 (車いすテニス指導者) 北京パラリンピック金メダルへのチャレンジ
第2回 平成21年度	功労賞	塚越 克己 (スポーツ医・科学研究者) 日本のスポーツ医・科学の発展を牽引した「縁の下の力持ち」
	奨励賞	増田 雄一 (アスレティックトレーナー) トップレベルのサポート技術を一般レベルに拡大する取り組み
第3回 平成22年度	功労賞	高田 静夫 (サッカー審判員) 日本人審判員の育成をめざした各種制度の確立と運用
	奨励賞	中村 宏之 (陸上指導者) 雪国から世界をめざすトレーニングの独自開発と実践  中北 浩仁 (アイススレッジホッケー指導者) 強化システムの大改革で日本初のメダル獲得にチャレンジ
第4回 平成23年度	功労賞	岸本 健 (スポーツ写真家) スポーツ写真家の草分けとして、スポーツ報道の機会拡大に貢献
	功労賞	水谷 章人 (スポーツ写真家) 独創的な表現でスポーツの魅力を伝え、スポーツ写真家の育成・環境整備にも尽力
第5回 平成24年度	功労賞	樋口 豊 (フィギュアスケートコーチ、振付師、解説者) 国際的な信頼と幅広いネットワークを活かし、日本フィギュアスケートの「開国」に貢献
	奨励賞	江黒 直樹 (ゴールボール女子日本代表チーム ヘッドコーチ) 「楽しいリハビリスポーツ」の普及をめざした 日本女子ゴールボールチーム 金メダルへの挑戦
第6回 平成25年度	功労賞	臼井 二美男 (技師研究員、義肢装具士) スポーツ用義足の第一人者として「走る歓び」を提供する挑戦
	奨励賞	東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会 戦略広報部 戦略広報という立場から東京2020招致を支えたプロフェッショナル
第7回 平成26年度	奨励賞	妻木 充法 (医学療法士、鍼灸あん摩マッサージ指圧師、日本体育協会公認アスレティックトレーナーマスター) 公正なジャッジを支える「鍼治療」の技術
	奨励賞	門田 正久 (理学療法士、日本体育協会公認アスレティックトレーナー、日本障がい者スポーツ協会公認スポーツトレーナー、介護予防主任運動指導員) 障害者アスリートのメディカルサポート環境を拡充する取り組み

**選考委員会** (敬称略/五十音順)

選考委員長	浅見俊雄	東京大学名誉教授/日本体育大学名誉教授	選考委員	篠原菊紀	諏訪東京理科大学共通教育センター教授
選考委員	伊坂忠夫	立命館大学スポーツ健康科学部教授・副学部長		杉本龍勇	法政大学経済学部教授
	衛藤隆	社会福祉法人恩賜財団母子愛育会日本子ども家庭総合研究所所長		高橋義雄	筑波大学体育系准教授
	遠藤保子	立命館大学産業社会学部教授		福永哲夫	鹿屋体育大学学長/東京大学名誉教授
	景山一郎	日本大学生産工学部教授		増田和実	金沢大学人間社会研究域人間科学系教授
	川上泰雄	早稲田大学スポーツ科学学術院教授		丸山弘道	株式会社オフィス丸山弘道
	北川薫	梅村学園学事顧問/梅村学園・中京大学スポーツ将来構想会議議長		村田互	専修大学ラグビー部監督
	草加浩平	東京大学大学院工学系研究科特任教授		山本裕二	名古屋大学総合保健体育科学センター教授
	小島智子	追手門学院大学客員教授		ヨコ ゼッターランド	嘉悦大学女子バレーボール部監督
	定本朋子	日本女子体育大学大学院研究科長/基礎体力研究所所長・教授			

※競技団体、大学、報道機関、ジャーナリスト等から候補者の推薦を募り、2回の選考委員会を経て決定

第 8 回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 [功労賞]

# 「すべての障がい者の生活にスポーツを——」 その信念を貫いた 40 年

ふじわら しんいちろう

藤原 進一郎 (1932 年生・岡山県出身)

日本障がい者体育・スポーツ研究会 元・理事長、  
日本障がい者スポーツ協会 元・理事、技術委員会 元・委員長、日本パラリンピック委員会 元・運営委員、  
極東・南太平洋身体障害者スポーツ連盟(当時) スポーツ委員会 元・委員長

1974 年、屋内プールを備える全国初の障がい者優先利用のスポーツ施設、大阪市身体障害者スポーツセンター(現・大阪市長居障がい者スポーツセンター)の指導課長に着任。「障がい者＝患者」「障がい者のスポーツ＝リハビリ」ととらえられがちだった当時の社会認識の中で、藤原氏は「いつ、たとえ一人で来ても、障がい者がいろんなスポーツに親しめる施設」という個人利用重視の運営を志向して、楽しみとしてのスポーツを提供した。以来、障がい者のスポーツの一般化・日常化に尽くしながら、その第一人者として競技ルールの整備や選手指導、さらには指導者の育成や団体の設立支援など環境整備にも力を注いだ。その対象は、楽しみを目的とした市民からパラリンピック等で活躍するアスリートまで、また領域は人々がより良い環境でスポーツを行うためのさまざまな仕組みづくりに至り及び、「今日の我が国の障がい者スポーツの姿、そのすべてに藤原氏の足跡と功績がある」(公益財団法人日本障がい者スポーツ協会 中森邦男強化部 部長、日本パラリンピック委員会 事務局長)といえる。

「チャレンジの足跡」 大阪市の中学校に保健体育の教員として 21 年間勤務。同時に大阪陸上競技協会や中学校体育連盟の理事としてスポーツの指導などに関わっていた。この時期、大阪で開かれる障がい者スポーツ大会の審判手引書を整備したことをきっかけに、障がい者スポーツとの関わりをもった。教職を辞した 1974 年、大阪市の職員となり大阪市身体障害者スポーツセンターに出向。初代館長から「私の専門は福祉。医療についても専門家がいます。だからスポーツのことはあなたに任せたい」と一任され、指導課長として利用者のスポーツ指導に当たった。当時から「すべての障がい者の生活にスポーツを」という思いを強く持ち、それまで「患者さん」としてとらえられてきた障がい者を「お客さん」として迎え入れ、広くスポーツの楽しさを提供した。

市民がいきいきとスポーツを楽しむ現場で指導を行い、障がい者のスポーツ、そして障がい者の競技スポーツの知見や指導技術を積み上げた藤原氏は、1980 年アーヘンパラリンピックに日本選手団のコーチとして帯同。翌 1981 年、日本身体障害者スポーツ協会(現・日本障がい者スポーツ協会)に新設された技術委員会の初代委員長に就任し、2006 年まで 25 年間同職を務めた。その間、地元・長居で勤務しながら、1984 年ニューヨー

クパラリンピックでの日本選手団監督を皮切りに、1988 年ソウル大会から 1996 年アトランタ大会まで夏季パラリンピック 3 大会連続で日本選手団総監督を務め、団長として選手団を率いた 2000 年シドニー大会では 41 個のメダルを獲得した。また、1998 年長野冬季パラリンピックでも日本選手団総監督を務め、12 個の金メダルを獲得している。



技術委員長就任当時、それまで福祉施策(社会参加・自立支援)として見られがちだった障がい者のスポーツに一般のスポーツ理論を採り入れるとともに、全国身体障害者スポーツ大会の競技規則等を整備。合わせて指導者制度の確立や競技団体の設立支援、競技会の企画や運営、選手の強化体制の構築・整備に加え、障がい者の体育・スポーツの振興に関わる複数の著作や、日本障害者体育・スポーツ研究会の発足・運営など、指導者の育成

等にも多大な功績を残した。

2006 年に技術委員会委員長を退任した後も、後進の指導や指導技術の向上のために幅広い活動を展開するとともに、東アジア・南太平洋地域の障がい者スポーツ統括団体フェスピック連盟の役員として活躍。2006 年には同団体から特別表彰であるフェスピックオーダーが授与された。

第 8 回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 [奨励賞]

## 先端技術を駆使したデータ分析で ラグビー日本代表の躍進に貢献

なかじま しょうた

中島 正太 (1985 年生・東京都出身)

前・15 人制男子ラグビー日本代表チーム / 現・7 人制男子ラグビー日本代表チーム アナリスト

エディー・ジョーンズヘッドコーチ(HC)体制がスタートした 2012 年に、ラグビーワールドカップ 2015 に挑む日本代表チームのアナリスト(分析担当)に就任。以来、ジョーンズ HC 以下 5 人のコーチのもとで、「世界一の準備でベスト 8 をめざす」という目標に向け情報収集と分析に奔走した。ジョーンズ HC らが求める情報の領域は多岐にわたり、日本代表チームの練習および試合の記録・分析はもちろん、世界中で行われているラグビーの試合映像、各国のチームや選手に関わる詳細データ、さらには試合会場やその気象情報に加え、時にはラグビー以外のスポーツの試合など広範囲なデータ収集・分析・提供を行った。また、より精度の高い情報をチームにフィードバックするため、ドローンを導入するなど最新の機器や手法も積極的に活用。ワールドカップで 3 勝を挙げ、世界に衝撃を与えた日本代表の躍進に「縁の下の力持ち」の一人として貢献した。なお、2016 年リオデジャネイロオリンピックでは、7 人制ラグビー男子日本代表チームのアナリストとして再び世界をめざす。

**| チャレンジの足跡 |** 熊谷工業高校、筑波大学ラグビー部では SO として活躍。卒業後は、セコムで 1 年、キヤノンで 3 年、トップイーストリーグの現場でアナリストとしての実績を積んだ。2012 年、エディー・ジョーンズ HC から指名を受け、ラグビーワールドカップ 2015 に挑む日本代表のアナリストに就任。ここから「世界最高の準備」に向けた 4 年間にわたるチャレンジがスタートした。

試合に向けて対戦チームへの対策を練り、トレーニングを通じて選手への落とし込みを行うコーチ陣に対し、アナリストの主なミッションはその前段階の準備を情報によって整えること。たとえば、ジョーンズ HC から「理想的なアタックシーンの映像を 2 つ用意」といったリクエストが入れば、膨大なデータから意図に沿ったシーンを選び出し、数時間のうちに編集データを提供する。いつ、どこでも、またどんな要求にも即座に対応できるよう、2TB のハードディスク 8 台は常に手元にあった。

接点で人数をかける戦い方は、運動量で優位性を持つ日本が世界と戦うための生命線だった。しかし、二人がかりで相手を止めにいけば、そこにはディフェンスラインが手薄になるという危険も生まれる。そのリスクを回避するため、低くタックルに入り、すぐに立ち上がって 3 秒以内にディフェンスラインに戻ることが選手に義務づけられた。リロードと呼ぶこの動作に、さらにジョーンズ HC は 75%という具体的な

達成率も定めた。その動作を判定するのをもた、アナリストの任務の一つ。「選手の評価にも直結する仕事。必要を感じれば『エディーと話してみるように』と選手に渡す映像データに一言を添えることもあった」という。

また、ジョーンズ HC は、「サムライ・アイズ」という言葉を使って鋭い視線でピッチ全体を見渡し、スペースを衝いて一発で仕留める戦術眼や、ボールのないところでの質の高い動きを選手に求めた。これらを磨くためにラグビーボールの後方から広角撮影



した映像が必要となり、導入したのがドローンだった。ドローンによる撮影データは手元のスマートフォンに即時送信され、練習終了後 5 分以内で各コーチに届けられた。

また、「扱いやすく、わかりやすいフィードバック」を目的に、その手法についても工夫を凝らした。クラウドシステムを利用し、タブレットでデータを提供することで、選手はどこにいても、たとえば宿舎のベッドの上でもトレーニングを振り返ることができた。

就任期間中、チームとしての活動は合計 520 日にも及んだ。日本代表はその長い戦いをワールドカップ初の 3 勝という結果で結実させた。「世界最高の準備」によって積み上げられたその経験は、日本スポーツアナリスト協会が 2015 年 12 月に開いた「スポーツアナリストティックジャパン 2015」での講演により、幅広く日本スポーツ界の資産として共有されることになった。